

ヒマラヤ

No. 298



1996 SEPTEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1997年H A J 登山隊員募集

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A J の登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1997年7月20日～8月25日(43日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:80万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J 事務局まで

玉珠峰 (6,179m)

青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には1週間滞在の予定です。

記

1. 期 間:1997年7月25日～8月17日(24日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:60万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 資料請求先:H A J 事務局

ヌン (7,135m)

インド・ヒマラヤのサマーキャンプとして、1997年夏もカシュミール・ヒマラヤで開催します。

カシュミールの盟主ヌンの高峰登山とラダックの素晴らしい雪上のヒマラヤの旅が楽しめます。

記

1. 期 間:1997年7月20日～8月24日(36日間)
2. 隊 員:10名
3. 費 用:75万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J 事務局まで

表紙写真

今春、ゴンドコロ・ピークを目指したが、雪が多くてベース・キャンプに辿り着くことさえできなかった。しょげ返える我々の心をいやしてくれたのが、頭上に悠然としてそびえ立つ名峰マッシャーブルムであった。

(記; 関根 幸次)

ヒマラヤ No.298

- | | |
|---|----------------|
| 1. PEOPLE | Bae Seung Youl |
| 2. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉 | |
| 4. 中高年? ヒマラヤ流れ旅(7) | 阿部 淳 |
| 11. 中国高峰登山15年小史(13) 四川・雲南その2 | |
| 13. プラブーツ突然破壊シンポジウム(3) | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

第二回目をむかえた「日韓岳人シンポジウム」が、6月1日、韓国の釜山で開催された。昨年4月、第一回の開催が日本（大阪）であったため、今回は日本側が訪韓して開かれたもの。

シンポジウムの前に、近郷の山でハイキングと岩登りによる、日韓岳人の親善交流が行われた。ハイキング・コースはよく整備されていて、途中の鞍部にはキャンプ場もあり、青少年の野外活動の場となっている。鞍部の手前の主稜線から少し下った所に幾つか岩場があり、ここがフリークライムを楽しめるゲレンデであった。

さて、シンポジウムには、大阪府岳連から石塚会長以下、城副会長、河本理事長、大西海外委員長ら。日山協から八木原国際部長、広島県岳連から名越海外委員ら4名。長老の住吉仙也氏を含めて日本側29名。韓国側は、大韓山岳連盟任会長、高副会長、金事務局長、地元釜山市連盟からは、金会長、李副会長、仁川商工会議所の李会長ら各地から選抜された岳人合わせて韓国側70名。

開会にあたり大韓山岳連盟の高副会長、大阪府山岳連盟の石塚会長の挨拶のあと、出席者の紹介があり講演に移った。また、懇親会の最中に大韓山岳連盟の任会長が到着し、表彰式等も執り行なわれた。

今回のテーマは「自然保護」であった。初めに日本側から山森がテイクイン、テイクアウトの精神と具体的な方法論について、テイクインについてはラーメン、チョコレート、コーヒーの実物を持ち込み実演をまじえて発表し、テイクアウトについては現場の作業模様をスライドにより紹介した。なお、この講演の全文が前もって韓国語に訳出され資料として配布された。

次いで韓国側は、ベイ氏（裴承烈）がネパールを中心としたヒマラヤの実情について、分析検討したことについて発表した。正直言ってこのような真摯な研究が、韓国登山界で実施されていることに驚きを感じると共に、お隣の韓国の実態が日本の登山界の中で、情報として公開されていないことに唖然とし言葉の壁を感じた。



講演の冒頭ベイ氏は、ヒマラヤの環境に悪影響を与える要素として、情報・通信・交通の発達を上げ、さらにその国が観光の振興のために大規模な登山者を無策で受け入れた結果、文化と生活基盤の質を低くし、環境を破壊していると解説した。

また、「人口の過密」と題するまとめでは、巡礼者、トレッカーと観光客、登山隊について触れ、これら流入する人々に提供する宿泊施設の建設や食事などのための森林の伐採、短期間に特定の地域に大規模の人口が流入するためにもたらされる大便やゴミ公害の問題が起きていると解説。さらに伐木・排泄物・ゴミ・社会的問題・現地人の努力について項目ごとに事例の紹介を行なっている。

特に社会的問題として、ネパールでは外の人々が持ち込むウォークマン、カメラや派手な服装に刺激され、それらを購買するための資金を得るために、若者がカトマンズに集中するようになり、その結果都市部は劣悪な勤労環境が出来、ひいては犯罪に結び付くことになると解説。このように若者の村離れを防止するためには、登山者は、現地購入やポーター賃の支払いに配慮して、現地にお金を落として、彼らの生活の向上に一役かうべきだと提案している。

ベイ氏は1982年にネパールのクーンブ・トレッキングを皮切りに、84年にはカン・グルー、89年インドのパギラティⅢ、90年シェラ・ネバダ、91年アンナプルナⅠとヒマラヤやアメリカでの登山経験を持つ。 ベイ シェユン ヨウル 37才。

裴 承烈 1958年12月23日生

HAT-J 塵芥処理プラントの現状と ヒマラヤ街道のゴミ

小室 豊

今年の4月末からゴールデンウィークを利用してルクラからゴークョ・ピークまでトレッキングを楽しんできた。この折、協会の山森専務から、数年前にHAT-Jがルクラに建設した塵芥焼却プラントが正常に稼働しているか調査して欲しいと依頼を受けたので、その報告をする。

この数年、毎年一人でルクラからのトレッキングを楽しんできた。言葉が余り通じないため、日本語、英語それに手ぶり身振り語で地元の人たちと交流してきたので、満足いく調査報告になっていないかも知れない。

4月27日(土)20人乗りのプロペラ機でルクラ空港に下り立ち、常宿しているロッジに立ち寄った。出発の準備をしていると、その晩宿泊を予定しているパクデンのナマステロッジで手配してくれたガイドPemba君が“Are you Mr. Komuro”と片言の英語で、近付いてきた。“Yes, I am”ということで、ガイドが来れば、出発準備完了である。出発前に山森専務の言葉を思い出し、Pemba君にHAT-Jのことを説明し、そのプラントを見たいと言うと、“近いので案内する”と言って、連れて行ってくれた。場所はルクラ飛行場からナムチェバザール方面への道を200mほど進んだところで、右側に70~80m上ったところである。右側に曲がる地点にはSPCC (Sagarmatha Population Control Committee) とHAT-Jの

文字が書かれた看板があり、分かりやすい場所であった。焼却プラントは石造りの建物屋で、目立たないが立派なものであった。あいにく当日は土曜日で、ネパールの休日に当たるため、留守番が一人いるだけで、プラントは停止していた。状況がよく分からないため、帰りに再度訪問することにし、トレッキングに出発した。

■HAT-Jの焼却炉

予定より一日早く、5月8日(水)の午後4時過ぎにルクラに戻ってきたので、宿泊するロッジで、荷物を置いてからSPCCを訪問することにした。SPCCの事務所は宿泊するロッジの筋向であるが、時間が遅いため閉鎖されていた。事務担当のMiss.Nhima Sherpaが空港の山側にあるヒマラヤンホテルで仕事をしていると耳にしたので、そこを訪問した。HAT-Jの建設した焼却プラントの現状を質問したところ、彼女は午後5時を過ぎていたにもかかわらず、プラントにまだ従業員がいると言って、わざわざ案内してくれた。

現在、一人の運転員と二人の作業員で1日8時間(9:00~17:00で昼休み1時間)正常に稼働しているとのことで、当日の働いていた3人とMiss.Nhimaの記念写真を写した。プラントには技術的な問題はないとのことであるが、あえてあげれば煙突周辺が局部加熱し、屋根の部分が熱くなるのが気になっているようであった。焼却塵芥はHAT-J Newsで報告されているようにルクラから上部のカラパタールやゴークョ方面から集められたもので、十分焼却できているようであった。ただ将来は、観光客の増加にともなう塵芥量の増大、回収能力の拡大によって容量不足がいずれ発生するものと思われる。ただ、建設計画でも問題点として指摘されていたが、数十kmもある山奥から、人や牛の背中だけに頼らなければならない塵芥回収方法の改善が大きな課題であろう。

プラントは正常に稼働しており、従業員はもと



より地元の人たちにもこのプラントに誇りを持っているようで、このプラント建設に関係したHAT-Jの人びとの苦労が報われているようであった。焼却炉の正面から内部の焼却状況や、プラントの動力源となっている太陽発電による電力蓄積用電池なども写真に撮影してきた。

■ヒマラヤ街道のゴミ

調査依頼を受けたことから、ごみの散乱状況に関心を持ち、トレッキング中ごみについて気を付けて歩いたので、その感想をまとめてみたい。ルート上の塵芥はほとんど見掛けなかったが、ロッジ近辺になると少々汚れていたように思われる。しかし、トレッキング街道のロッジ自身もごみ箱を備えるようにし、汚れを防いでいた。昨年と比較すると、地元の人たちの環境維持に対する意気込みもかなり進んでいるようである。また、各国のトレッカーたちも塵芥の散乱防止に協力しており、トレッキング街道を清掃している団体にも出会った。ただ、カトマンズに空輸するため集められた空ビンが、ナムチェバザールの上にあるジャンボチェ飛行場に大量に積まれているのを見て、回収方法と輸送方法に大きな問題を抱えていることがうかがえた。サガルマータ国立公園一美しいといわれるゴーキョロッジ周辺の塵芥の量（ごみ捨て場に集められているが）を見ると、人や牛の背中にしか頼れない輸送に、この地域における環境維持に限界を感じせざるを得なかった。

最近の報道によると、エベレストBC付近での登山隊の残した廃棄物や使用済み器材の放置が目立つといわれているが、私の見た限り、トレッキング街道のごみ近況は、個々のトレッカーの注意



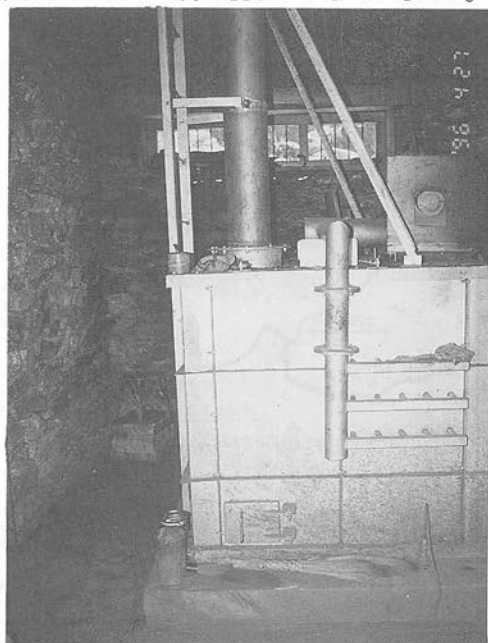
▲焼却炉の模様二態 ▶

▼焼却炉管理のスタッフ達



で、清潔さが保たれているように思えた。昨年はカラパタール方面へトレッキングを試みたが、高山病に悩まされ、ペリチェまでしか登れなかったが、この一年間でトイレが綺麗になったのに驚いた。昨年は5月にサガルマータ地域、7月にアンナプルナ地域を歩いたが、ごみやトイレ、さらにシャワーの清潔度はアンナプルナ地域が優れていると思ったが、今年のトレッキングではサガルマータ地域も改善され、アンナプルナ地域に対し遜色がなかった。

自然が人類の貴重な宝物である。ヒマラヤもこの自然の一角であるので、登山やトレッキングをするわれわれ一人ひとりが環境維持に心掛け、ヒマラヤという人類の共通のこの宝物を大切にすることをいつまでも持ち続けていきたいものだ。



パキスタン (Ⅱ) カラコルム・ワンダー

(1) 美わしのフーシェ・バリーへ

●パスポート・トラブル

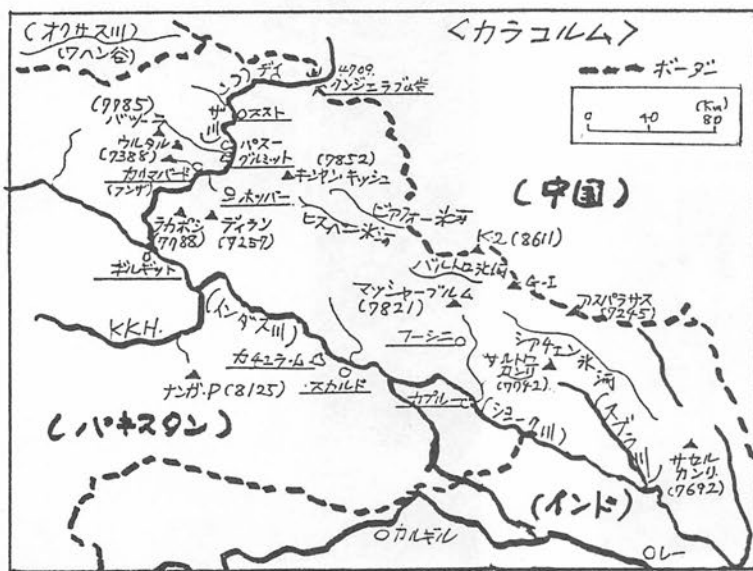
阿部 淳

ギルギット…古くから憧れた町である。ここから帰る予定であったコックのアリ君がフーシェ谷に自分の家があるので乗せて行ってくれと言う。OK。翌日の6/7、スカルドへ向けてインダス川を東に進む。岩石と砂礫の多い典型的なカラコルムの世界だ。時折、緑と村が現れ、NAPWD (政府北部公共事業局) の看板が示される。6時間でスカルドへ入る橋を渡りチェック・ポスト。ここで一とモメとなる。シルクロード・ツアー社にパスポートの必要部分だけコピーで持っていけと言われた。紛失や盗難を避けるためらしい。ホントに大丈夫? “大丈夫よ、ここはパキスタンだから、いつもそうしているから”。それにボクのパスポートはインド・ネパールの出入国やビザのスタンプで一杯だったので気遣ってくれたらしい。ポリスにボクがコピーの説明をしているとアリ君が呼ばれてウルドゥ語となり、彼に聴いても英語が乏しいから“ノー・プロブラム”だけでボクには判らない。ここから若いポリスが乗り、便乗するのだと思ったがどうも監視役だったらしい。

スカルド・バリーの広大な縞模様の美しい川原

と別れてスカルドの町。こここそカラコルムの基地、バルトロ氷河へのキャラバンの出発点でもある。ボクには“ポーター・トラブルの村”の印象が強いが、予想よりもずーっと大きいのに驚く。まず警察署に行くと言う。やはり免許証のコピーだけ持ったドライバーが数人いてトラブっている。署長が外出中なのでコピーを預け、ホテル探しに出る。結局PTDC (政府観光公社) のK 2 モーター (600Rs=¥1,500) にし (アリ君とドライバーは友人宅泊)、昼食を済ませて警察署へ戻る。ボクは“エイジェンシーが、紛失したら困るからという配慮 (善意) で…”と説明したがアリ君は口角泡を飛ばして何かをまくしたてていた。そのうち、急におとなしくなり若いポリスと廊下へ出て行った。何かたしなめられたのか? 署長が戻ったので挨拶し説明。イスラマバードのシルクロード・ツアー社から明日の便で旅券を届けて貰う事でOK。当座は旅券の再Faxでよい事になった。

ホテルに戻って電話、手配する。督永女史は「スカルドは予定に入っていなかったでしょ。スカルドは (オリジナルが) 要るのよ。どうします?」



「ボクの計画は凡そのプランだけで変わるけど」と言ったし (初めに娘さんにも)、予定表にも“Tentative Plan (仮のプラン)”と書いたでしょう。ベストな方法を、任せます」。ここではファックスもコピーも装置が少なくようやく入手して再び警察署。手続きの間ボクは署長と四方山話をしていた。三百年前までここは仏教 (ラマ教?) 圏であった事、彼は日本びいきである事など…。運ばれた紅茶に二人ともダイエット・シュガーを入れたので、糖尿仲間だと大

笑いした。今後のチェック・ポスト対策としてコピーに、承認の意の署長のサインを書いて貰った。アリ君は警察署に拘束されていたらしい。会社には“5時間牢屋に入れられて殴られた”と言ったそうだが、そんな時間があったか、それほど陰湿な様子は見なかったが…。20時過ぎにホテルに戻る。

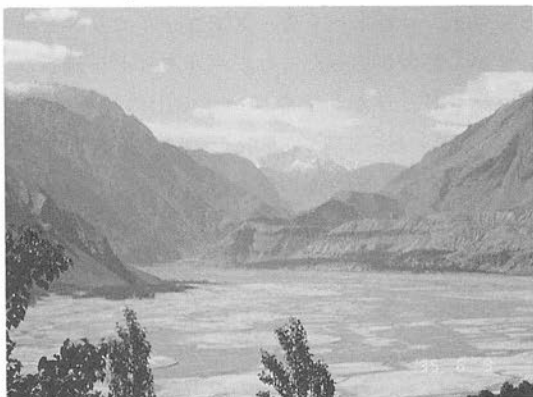
●マッシャーブルムを見に…

翌日、エアー・カーゴ着便を待つ間、署長が勧めるサトパラ湖へ行く(3分)。釣り場とボートがあるが、周囲の土色の山裾が映って美観を欠く。カーゴには旅券はなく、昨夜のFaxは最小限度の4頁だけ…。その約束違いに何の連絡もなし…。一方的なエージェント・ベースだが、もうクリアしたからこの際イイや。署長に報告・挨拶し、さらに奥に進む。インダス川からショーク川(Shyok R.)に入ると、やがてシャチェン北部の低い山並みが見える。4時間でカブルー、広い川を隔てた針峰群を臨むカブルー・イン(120Rs=¥300)に泊る。埃っぽくて汚いが眺めは良い。ここに日本人が経営するロッジ・K7もあると言う。

いよいよフーシェだ。ショーク川の広い流域のド真ん中に橋があり、渡ってすぐフーシェ川への分岐となる(Hushe R. 現地では“フシェー・リバー”)。ショーク流域のずーっと奥に白い山が見えてきた。それは紛れもなくインド領東カラコルムの山だ。感激し興奮する。村人はその山の名を「ヌブラ」と言う。やがてマチュルー村、アリ君の家がある。この小さな村にPTDCのゲストハウスがあり、そのテラスから広いショーク川と、かのヌブラの山が見えるので、帰りに泊ることにした。フーシェ谷は広く緑豊かで、マナリに至るベアス川を思い出させる。東側に針峰が連なり、マッシャーブルムがフレーム・インする。

5時間で最奥のフーシェ村。ここは登山と緑が深く、親子二代のガイド、ヤマンの家に招かれる。息子のグラスリ・ヤマンは中旬に飛田パーティーのキンヤンキッシュ隊に加わるそうだ。昼食の間に、ドライバーがオープン・ジープの床近くに置いた煙草を盗まれ、彼は“クレージー!”を連発して憤慨していた。子供や年寄りが沢山取り囲んでいたからか。マッシャーブルムはこのアングルか

▼フーシェ谷入口から東カラコルムの山



らは一層シャープで、鋭い双耳峰を見せてくれる。

帰りは午後2時過ぎ、周辺の氷河や雪が溶けて、合流する小川も増水し石を動かし運び去る。最初の難所を強行突破して成功したもののサスペンションが上に突き上げてハンドルが利かなくなつて修理。次の大物は行きも苦労した小川の横断で、川下側の石が流されたためジープが横に傾いて渡れず、一時はボクだけ歩いて帰り、ジープはフーシェ村に戻る事をも考えた。しかしドライバーのラスト・トライで川上側に大迂回して荒れる濁流の中を突破した。成功報酬として盗まれた煙草代プラスαをプレゼントした。ゲストハウスではアリ君がホームならではの素材とcockの腕を十分に発揮してご馳走してくれた。その夜、ヌブラへの思い多い、佳い一夜を過ごした。

●カチュラ・レイクの一夜

この村の上部、マチュルー・ラに登ればバルトロの連山が見えるという事を聞いたのはスカルドに戻ってからであった。残念! 知らずに離れた。

スカルドで昼食を済ませ、その先のカチュラ湖シャングリラ・リゾートに泊る。花と緑と中国ムードのレストラン、そして湖にはアヒルが遊び、よくアレンジされたリゾートである。客は新婚サンとリッチそうなファミリーが多い。3食付き2,500Rs(¥6,500)と高いが、スカルド・ウェイのラスト・メモリーにと贅沢を食った。

カラコルム・ハイウェイに入り、ラカボシ・ビュー・ポイントでは主人が酪農大ラカボシ登山隊の新谷隊長(HAJバツラII隊員)をよく覚えており、しばし休憩。隊長がBCにいた夜はヴァイオリンを弾き、上部キャンプの疲れた隊員達に

音楽を贈って慰めたと言う。ボクも彼のニセコのヒュッテ、ウッドベッカーズでヴァイオリンを随分せがんだ事があった。ギルギットを過ぎカリマバード、ラカボシやフンザの山に見えるPTDCフンザ・モーター (650Rs=¥1,700) でくつろぐ。思えば、忘れ得ぬ旅だったなァ。

(2) KKH(カラコルム・ハイウェイ)に沿って ●ウルタルBC

ホテルのマネジャーに、ローカル・ガイドを世話してもらい、ウルタル (7,388m) のBC (3,300m) へ行く。若くて英語の達者な良いガイドで僅か250Rs (¥650; コックのアリ君で25\$=¥2,500) だ。ウルタル谷を少し入ると黒川名のレリーフがあった。トレイルは沢沿いの土砂と石砂利混じりで、急斜面では侮れない。やがて広くて気持ちのよいメドウのBCに着く。ウルタルの上部は流れる雲を冠てよく見えないが、氷壁とアップー氷河はさすがに凄い。岩影に長谷川恒男のレリーフ、その100m上部に星野清隆氏と並んだイスラム式の墓があった。このガイドも事故の時、救出・収容に尽力したと言う。

長身のアメリカ人が単身で下りてきて、レディース・フィンガー近くでロック・クライミングをしてきたと言い、先に下っていった。ややして下の沢筋から大きな音響と土煙りが立ち上った。何だろう? 下りは増水してトレイルの側壁から流れる水も増え、石砂利を流し、崩れ易くて並大抵ではない。時にはシャワーを浴びながら不安定な石の堆積を駆け抜けた。フト下を見ると、かのアメリカ人の姿が小さく見えた。やはりこの石沢で落ち、本流に沿って下るらしい。ガイド君は、この谷は別名Death Valley (死の谷) と呼ばれ、本流は“極めて難しい”と言うが、無事帰還できたらしい。ガイド君が街でフンザ・パニ (ワイン) を世話すると言ったがダメだったらしい。致し方なくノン・アルコール・ビールにウイスキーを入れてスペシャルとした。

●クンジェラブ峠へ

峠は、ギリギットから270kmしかなく、意外に短時間で行ける。ハイウェイが無かった頃、フンザの道は事故も多く2~3日を要した悪路と記憶しているが、ハイウェイの対面にはまだ旧道の痕

▼ホッパー村からウルタル全容



跡が残っている。2時間半で緑のゴジャール・エリア、ここソストは出入国事務所があって賑やかだ。中国製品が多いし、この先は中国のトラックの行き来が多くなる。ディ村から道が登りとなり次第に寒さを覚える頃、広い高原に残雪と雪の山が現れ、初めてヤクの群れに出会う。峠往復の人はパスポートをデポすると聞いたが、ボリスが直接車に乗りこんで同行し、帰り道で他車に出会うと乗換える。

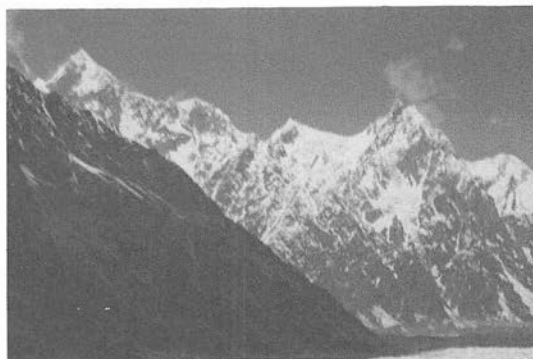
5時間で峠。風が強くおそろしく寒い、周囲に高い山がなく、峠と言うよりは高原のコルである。これで4,700m? かつてロータン・パス (4,000m) に車で行って降りた途端に、クラクラと眩暈を感じた事があったが、ここでは高い気配は感じない。当初ここから中国領ウイグルに入ることにも念頭にあったが、今のウイグルは昔と変わり人も街もパターン化され、ビジネス化されたと聞いたので今回はパスした。夕方、グルミットのシルク・ルート・ロッジ (510Rs=¥1,300) に泊る。フンザ川の針峰群に直面して眺めが良い。カリマバードのPTDCで聞いたホテルだが、ここは水は湧き水の利用で濁りがなく、電気は自家発電で18時からオンする。この辺りでフンザ・パニや中国製のウォッカ・ラムが手に入るので、カチュラ湖いらい初めて頭を洗ってサッパリし、“不老長寿の桃源郷フンザ”の夜を一人、フンザ・パニで乾杯する。

●バツラとナガール

この西にはバツラ山群、東にはヒスパー山群がある。ホテルでローカル・ポーターを手配してもらい、シスパーレ (7,611m) を正面にパス

氷河を目指して進む。“Yes, beautiful”と言われたパス・レイクは灰色の泥沼だった。氷河の手前から北の尾根に登り、3,500mの高地砂漠を1時間半も横断するとバツラ谷である。急下降40分、広い谷の南にパス（7,283m）、バツラ（7,785m）、カンピレ・ディオール（7,143m）の名峰が続き、その遠い奥にワハン谷、オクサス川流域の白い山が見える。バツラⅡは78年H A J 隊が南面から初登頂したが、北海道の3人が加わっていたので身近で懐かしい。この氷河はここ数十年、後退して遠くなったが、なお長いドス黒いモレーンが残っており、底から不気味な炸裂音を発している。

ギリギットに戻る途中、カリマバードから東のヒスパー川を、トリヴォール、ブリアン・サール、モムヒル・サール(?)を眺めながらナガール〜ホッパ村（車の終点）まで入った。ここにゲスト・ハウスと民営の野営場（テント&食堂）があり、ガイドがたむろしている。非常に高い。ここからフンザ川を隔ててウルタルの全容を眺め、東にヒスパー氷河の西端部を窺った。南はディランに発



するヴァルタル氷河が迫っており、近づくとき黒いモレーンの下で衝突破壊音にドキモを抜かれる。

カリマバードのPTDCホテルに寄り、昼食を終えてジープに乗る時、誰やらが呼ぶ。シルクロード・ツアー社のガイド・ケイジ君で、キンヤン隊をパスまで送ってからボクに付くと言う。マイクバスから飛田、寺沢さんが降りてきて思わぬ再会となった。“あまりお酒のまないでネ”だって、もう手遅れなのに。“飛田さん、気をつけて頑張つてよネ”ほんとうに…。ギリギットは前と同じPTDCのホテルにする。さあ、次はいよいよチトラ行だ。

東京新聞の本

登山のオールラウンド情報誌



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

■第1特集

- 1月号★アイゼン、輪かん、スキー
タイプ別雪山山行
- 2月号 自然案内人と山を歩こう
山をもっと味わうために
- 3月号★全員集合/山スキー・フリーク
- 4月号 自然の源・針葉樹と広葉樹、
照葉樹の森を歩く
- 5月号★GWに楽しむ山
雪稜・新緑そして花の山
- 6月号 北海道の山と人
日高、大雪、知床をめぐる
- 7月号★読者がつくる夏山プラン
ファミリー賛歌
- 8月号 湿原の山旅
地図で探したとっておきの池塘
- 9月号 私の好きな山小屋
近郊の山から北アルプスまで
- 10月号★HOW TO 紅葉の山を味わう
撮る、描く、遊ぶ
- 11月号 ローカル線の山旅
徹底ガイド付き
- 12月号 実践/雪山へのいざない
(入門編)

(★は特大号となります)

■特別企画

- 1月号「僕でも登れる？」
——冬のハケ岳を楽しむ
- 2月号「僕でも登れる？」
——アイスクライミングに挑戦
- 3月号「僕でも登れる？」
——尾瀬で山岳スキーに開眼
- 4月号「僕でも登れる？」
——これぞ岳人/春雪の西穂高
岳へ(12回完結)
- 5月号「アルプス・ツェルマット研究」
- 6月号「モンブラン一周トレッキング」
- 7月号「花のアルプス・ハイキング」
- 8月号「ドロミテの岩塔に遊ぶ」
- 9月号「南米ロライマ山にロストワ
ールドを訪ねる」
- 10月号「ニュージーランド——手付か
ずの自然を楽しむ」
- 11月号「海外トレックの王道・エベ
レスト街道に行く」
- 12月号「冬の北米、アウトドアライフ
最新事情」

東京新聞出版局(中日新聞) 千108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

地域ニュース

《パキスタン》

ウルタル陥落す

ウルタルⅡ峰(7,388m)に挑戦していた、日本山岳会東海支部隊の山崎彰人(28)と村岡清司(24)の2人は、7月11日南西面ルートから同峰の初登頂に成功した。

新登山局長就任

長らく登山局長を務めた、ターレ・ムハマド氏の退官に伴い、このたびナジール・アーマド・アルヴァ氏が、新登山局長に就任した。

アルヴァ氏は、1941年8月14日インドのパンジャブ東部ジュルンズールに生まれた。現在55才。ラホールにあったアメリカ人創設の前クリスチャン・スクールを卒業後、大蔵省に勤務した。

1986年観光省に入省し、1989年まで在職。その後1991年まで観光省の派遣でイタリアに単身在住する。

1992年パキスタンに帰国。1995年4月から再度観光省に戻り、登山・トレッキングセクションを担当し、今年4月26日から現職となった。

氏自身は登山経験はないが、K2ベースキャンプやナンガ・パルバットBCのトレッキングを始めとして、トレッキング経験は豊富である。

一男一女の父親。

《中国》

1996年中国登山隊一覧

山名	標高	派遣母体	人数
チョモランマ	8,848	福岡市山岳協会	17
〃	〃	立正大学	9
チョー・オユー	8,201	札幌中央労山	8
チャチャチョ	6,447	長野県山岳協会	7
チョモラーリ	7,326	〃	10
チェルー	6,168	さがみ家族山の会	2
ハーン・ヤイリク	6,774	JWAF	7
ボゴダ	5,455	横浜	

※ムスターグ・アタについては、下記の記事を参照されたい。

ムスターグ・アタに5隊挑戦

今夏H A Jでは、ムスターグ・アタにサマー・キャンプ隊(中川裕隊長ら6名)を派遣するが、同峰には日本からH A J隊以外に、大阪府勤労者山岳連盟隊(林孝治隊長ら10名)、岐阜県教員隊(渡辺勉隊長ら5名)、神奈川隊(燕昇司実隊長ら7名)が挑戦する。神奈川隊は北峰を目指す、他は全て西面のノーマル・ルートから主峰が目的である。

また、秋には、中川裕、岩崎洋、鈴木正典の3名が、ムスターグ・アタ東面の新ルートから登頂を目指す。登山隊名は「浪」。

トピックス

化学酸素発生装置の空輸禁止

7月15日運輸省航空局は、国際民間航空機関が米国バリュージェット事故を契機に、当面の措置として、化学反応により酸素を発生する装置については、旅客機での輸送を禁止する旨決定したと関係筋に通達した。

この結果、該当する化学酸素発生装置を旅客機で別送することはできなくなった。

登山医学シンポジウム開かれる

恒例となった第16回登山医学シンポジウムが、6月7日～8日国立乗鞍青年の家で開催された。参加者約140人。特別講演として発表された「高気圧環境の臨床医学応用」と「発達途上国における旅行者伝染病」が参加者の関心と呼んだ。

日山協・海外遭対開かれる

6月8日～9日の2日間にわたって、日山協主催の「海外遭難対策研究会」が同上青年の家で開催された。報告ではH A Jのミニヤ・コンカ雪崩遭難と都岳連のシベリア、ポベダ雪崩遭難が発表された。また、山本正嘉氏が「高所登山に必要な体力とそのトレーニング方法」について本人の

体験を交えて講演。

翌日は海外委員総会が行われ、パキスタンに遠征する場合に日山協が発行している「推せん状」の廃止について意見交換が行われた。また、ネパールについても現状の報告と検討が行われた。

次いで尾形好雄氏が「高所山岳の環境保全について講演し、今春のサガルマータの遭難にからんで「有酸素登山の難しさ」に言及した。

横断山脈研究会開かれる

中国の北から南へ連なる「横断山脈」は、金沙江、メコン、サルウィン、ヤル・ツェンポー江などの大河と関連して様々な面で魅力のある地域であるが、ミャンマーやアッサムをも含めたこの地域に的をしばって活動しようと、表記の研究会が発足した。

第1回の研究会は、7月6日～7日の両日にわたり30名が参加して京都で行われ、中村保氏の「ヒマラヤの東」のスライドを交えた諸話と、1932年にミニヤ・コンカに初登頂したアメリカ隊について山本健一郎氏が講演。また、97年に南西稜からミニヤ・コンカを目指す広島隊の計画発表も行われた。

同研究会は、これからの活動を本格的に行うために、この地域に興味を持つメンバーを募集している。照会下記まで。

天津市坂本 8-13-12 竹内康之方

☎ 0755-79-2209 FAX 075-212-1321

Books

NEPAL HIMALAYAN '94

信州大学がネパール警察と合同で初登頂に成功したギャジカン (7,038m) の登山報告書。アンナプルナⅡ峰の予定から、ラトナ・チュリ (7,035m) とギャジカンの二つの初登頂を狙う計画に変更になり、最終的にはギャジカンだけとなった。

合同登山は大体が苦労の連続である。この山のように許可取得の条件としての合同はなおさらである。それぞれの分野で苦労した人達がいた結果成功を勝ち得たのであろうが、その辺の苦労を少々

体力はあって権利意識の強い若手達が理解していなければ、単一の組織の勝利とはならないであろう。その結果は本年のラトナ・チュリ登山で実証されそうである。

B 5 版 122頁 (内カラー30頁)

〒399-45 上伊那郡南箕輪村8034 信州大学
農学部森林科学科砂防学研究室気付

輝ける白き峰

栃木県高体連が昨夏、中国、チベット自治区のニンチン・カンサ (7,206m) に派遣した登山隊の報告書。ルートは西面から南面を経るもの。多くの隊員が事前に筑波大学の低圧室にてトレーニングを行っている。又、現地に同大学の浅野先生ら2人が同行した。

同時期、同峰には福岡大学と北京大学の合同隊も別ルートに入山しており、途中からは栃木隊のルートにイタリア隊も入山し、栃木隊の固定ロープを無断で使用して上部へ…。今時のヒマラヤではあちこちで行われているヨーロッパ勢の無法登山がここまで来てしまっている。

学術調査の報告なども盛られているが、やはり登山隊の報告書には、その山の歴史や周辺の山々の同定などが欲しいものだ。

B 5 版 138頁 (内カラー16頁) 価格3090円

〒321-35 芳賀郡茂木町茂木288 県立茂木高
校内 チベット学術登山隊実行委員会

五十歳からのヒマラヤ (石川富康著)

五十歳を過ぎてから、チョー・オユー、サガルマータ、ダウラギリⅠ、シジャパンマ中央峰と、4つの八千メートル峰に登頂した「東海の星」石川富康氏の若き日から現在に至る登山半生記。

山の世界は狭い。山登りを続けていれば、つづける時もあるが、結局は結婚、仕事と言いつつながら一時の熱気で山を去る人が多い結果として、続けている人物達は、どんなにケンカをしようとも最終には「わかり合える」ことになってしまう。

氏の若き日からの山人生からの教訓は、山はやっぱり続けてなんぼのものと云うことである。氏日「50歳からヒマラヤに登ったのではない。若い頃

からヒマラヤを目指して頑張ってきたんだ」と。

A 5 版 270 頁 1600 円 山と溪谷社刊

ヒマラヤン・ジャーナル Vol.52-1996

インドの未踏峰ニェギェ・カンサ (7,050 m) が昨秋 IMF 隊によって初登頂された。ニェギェ・カンサは、中国側ではトゥイ・カンリと呼ばれて高度も 6,980 m であることは、同志社大学隊のカントの報告で知られていた。同報告書には北面からの写真があるが、本書にも美しい山姿が紹介されている。

HAJ が 1975 年に初登頂したリシ・パハール (6,992 m)、サーフ・ミナール (6,547 m) などがあバギニ氷河の報告なども載っている。

ヒマラヤから

キンヤン便り

とにかく天気が悪く、イスラマバードでも晴天時で 30℃ 前後と例年に比べて 10~15℃ も気温が低く、高地の雪は異例に多い今年です。クンジェラブ峠も例年より 1 ヶ月半も遅い開通だったと云うし、毎日といって良い程雨に見舞われ、まるでモンスーンの様です。

内務省から回されたパスポート・オフィスでは、日本政府のパキスタン人へのビザ取得を厳しくしたこと、アメリカが経済援助を打ち切ったことなどをネチネチと云われ、我々は本来即日交付なのに翌日の木曜日。一緒に行ったアメリカ国籍の女性はへと 1 週間後の交付となりました。

キンヤン隊も何とかやっていますが、スムーズに BC 入りできるかどうか。昨年まで観光省で各地区のポーター賃金を定めていましたが、今年はそれもなく各隊で直接交渉し、従来より安くしてもかまわない、と非現実的なことを云っています。

明日キンキラバスでようやく移動します。

6 月 21 日 イスラマバードにて 寺沢玲子

K 2 便り

謹啓 ごぶさたしております。出発前はお世話になりました。現在我々は特にダブルもなく 6 月

16 日 BC 入りし、天気待ちといったところです。約 7 t の隊荷とともに一人の不調者も出ずにここまで来たことに満足しています。

しかし、かんじんの登山の方は、長期の悪天につきまってしまったようで、ここ 1 週間芳しくなくわずかに BC 入りの翌日、山本以下 3 名で取り付き上部まで行っただけで進展はありません。

他のチリ隊、日本の戸高氏も同様に停滞しており、あせらずじっくりやるしかない、と、開き直っています。それでは良い報告ができる様全力を尽くします。

敬具

6 月 19 日 JACK 2 EXP. 山本 篤

ディラン便り

サラーム／ サラーム／

出発に際しましては色々とお世話になりました。御陰様で無事イスラマバードに着き諸事すべてクリアして明日ブリーフィングの後、夕刻のローカルバスでギリギットへ向います。

ギリギットでは食糧他の買い出しに一日、8 日には BC 入りの予定です。パキスタンの事務手続きは、昨年より面倒になったようで困ったものですが、時間をかければ問題ありません。天気の方はインシアッラー。北の方はずいぶんと悪いようでみんな苦戦しているようです。ルーマニア隊はディアミールで 2 人が雪崩で亡くなったそうです。とにかく天気は行ってみなければ分からないのでとりあえず 3 週間位いはがんばって来ます。

7 月 4 日 チーム・ディラン '96 岩崎／鈴木

東京集会のお知らせ

日時 8 月 26 日 (月) 午後 7 時
場所 HAJ ルーム (地下鉄有楽町線東池袋下車 4 番出口から地上に出て右へ徒歩 2 分)
又は、JR 大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面 2 つ目の東池袋 4 丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩 2 分)

■財政支援金：松館正義 5 千円

5-2 シャラ・リ (先熱日・Xianre Ri)

- * 山脈：横断山脈。貢嘎雪山主峰。
- * 位置：成都(505m)の南西約440km。理塘(3948m)の南約177km。[28° 4' N, 100° 3' E]
- * アプローチ：成都がスタート地点である。成都までは北京から飛行機で2時間の旅。東京を午前の早い便で飛び立てばその日の内に成都に着くことができる。成都から雅安、石棉、西昌を経て雅砻江を渡り木里(2350m)まではジープで3日間の旅。さらにジープ一日で4080mの峠を越えてロード・ヘッドの白揚平に着く。ここから馬によるキャラバン4日でコンガ・チョングーに到着するが、途中最高所4850mを含めて幾つもの高い峠を越え4000m台をトレッキングする。BCは4時間ほど登った場所になるが、チョングーも可能である。東面や南面にBCを設営する場合は、チョングーから半日行程で到達できる。理塘からアプローチすることも可能であり、この場合は稻城経由でジープで1日。馬で半日行程である。
- * ルートの所要日数：1989年夏のH A J隊はC2を西稜のコルに出し5500mまで達したが、ここまでの所用日数は9日間。
- * 山の概念：主峰6032m。シャラ・リの東約7kmにシャノドジ(5958m)、南約6kmにヤンメイヨン(5958m)があり共に鋭峰である。
- * 通常の登山時期：春と秋のシーズン。

5-3 ゲニ (格聶・Genyen)

- * 山脈：横断山脈。
- * 位置：成都(505m)の西南西約440km。理塘(3948m)の西南西約67km。[29° 8' N, 99° 8' E]
- * アプローチ：成都がスタート地点である。成都までは北京から飛行機で2時間の旅。東京を午前の早い便で飛び立てばその日の内に成都に着くことができる。成都から雅安、二郎山(3437m)を越えて康定(2615m)に一日で入れるが、現在このルートは工事のため、石棉経由で康定を経てチベット高原

- * 山名：由来は不明。
- * 小史：1989年のH A J隊が初登山。
- * 参考文献：桃源境への山旅 [日本ヒマラヤ協会 1990年3月刊] ヒマラヤの東 (中村保) [山と溪谷社 1996年3月刊]

登山の概要

■主峰 (6,032m)

1989年

7月～8月 西稜 日本ヒマラヤ協会隊

初めての登山隊として入山。8月5日西面4500m地点にBC設営。北面にルートを決定。内院4700mにC1。15日西稜のコル5150mにC2を設営。翌日5500mに達したものの、岩が脆く下降時の安全が確保出来ないために登頂を断念した。18日西稜のコルを挟んで聳える5250m峰に全員が登頂した。

「隊長：山森欣一(45) 酒井國光(50) 西嶋鍊太郎(47) 松館正義(45) 大久保博(40) 干場晃(38) 菅沼弘子(37) 谷田川武(35) 橋本珠樹(28)

[桃源郷への旅 もう一つのチベット シャラリ峰登山記] ヒマラヤ216号 1989年11月

1993年

4月～5月 アメリカ/イギリスペアが入山するも偵察にとどまった。

に登り、一旦雅江に下って再び高原に登り理塘に到る。さらに南下して熱柯まで、成都からジープで5日間の旅。さらに馬によるキャラバン2日でBC(4350m)に到着する。

- * ルートの所要日数：1988年春のH A J隊はC2を出し2週間で初登頂した。

- * 山の概念：主峰6204m。ゲニの北東約5.4kmにシャザ(5807m)、北東約5kmに5716m峰がある。

- * 通常の登山時期：春と秋のシーズン。
- * 山名：ネンダとも呼ばれていた。「聖なる山」の意。
- * 小史：1878年夏のウィリアム・ギルが4340mの峠からゲニを見た。
- * 参考文献：神の山ゲニ峰 [日本ヒマラヤ協会 昭和62年12月刊] 神の山格聶峰 [日本ヒマラヤ協会 1989年6月刊] ヒマラヤの東 (中村保) [山と溪谷社 1996年3月刊]

登山の概要

■主峰 (6,204m)

1986年

10月 偵察 日本ヒマラヤ協会隊

偵察のため初めて入山。理塘から公路を西に向い、公路から南下して4650mの峠を越え公路から65kmで熱柯に到着。馬を雇い4060mの峠を越えてセドンに到着。翌日の晴れ間にゲニの東面を観察した。

「隊長：山森欣一(42)」

[格聶 (ゲニ) 偵察報告 ヒマラヤ183号 1987年2月号刊]

1987年

7月～8月 南東稜 日本ヒマラヤ協会隊
雅江周辺が大雨のため通行止めとなり北を

回って理塘に入り熱柯からキャラバン2日で8月2日4200m地点にBC設営。南東稜に取りつき5000mにC1を設営したが、悪天候のため登頂を断念した。

「隊長：飛田和夫(41) 江尻健二(53) 遠藤京子(48) 柴崎裕代(40) 林清剛(38) 小原博(38) 小沢隆明(37) 永尾剛士(36) 長谷川喜久夫(30) 伊藤哲朗(30) 安田素彦(29) 山崎賢二郎(28) 飛田真樹(13)」

[神の山、ゲニ峰 残してしまった課題 ヒマラヤ192号 1987年11月号]

1988年

5月～6月 南稜 日本ヒマラヤ協会隊

初登頂を目指して入山。5月30日4350m地点にBC設営。南稜に取りつき5150m地点にC1設営。東稜の下5750mにC2設営。6月11日飛田、滝田、伊藤の3名が初登頂に成功。翌日にも二度目の飛田と遠藤、天城、寺沢、大野が登頂した。

「隊長：飛田和夫(42) 伊藤哲朗(31) 遠藤京子(50) 天城敏彦(41) 寺沢玲子(36) 滝田収(31) 大野邦晴(26)」

[神の山、ゲニ峰初登頂 ヒマラヤ202号 1988年9月号]

5-4 ヤンモーロン (央莫竜・Yanmohlong)

- * 山脈：横断山脈。
- * 位置：成都(505m)の西南西約465km。巴塘(2589m)の東北東約17km。
- * アプローチ：成都がスタート地点である。成都から雅安、石棉経由で康定を経てチベット高原に登り、一旦雅江に下って再び高原に登り理塘を経て巴塘に到る。成都からジープで5日間の旅。BC(4200m)に到着する。
- * ルートの所要日数：1991年秋日大隊は2週間の活動で5450mに到達した。
- * 山の概念：主峰6060m。西峰6033m。5833m峰などがある。
- * 通常の登山時期：春と秋のシーズン。
- * 山名：由来は不明だが、下にある丘の名前。
- * 小史 * 参考文献：なし

登山の概要

■主峰

1991年

10月～11月 北面 日大北桜隊

南北両面を偵察し、北面4200m地点にBCを設営したのが10月22日。5200mにC1を出したが悪天候が続き5450mが最高到達地点となった。

「隊長：佐藤彰(55) 荒木幹治(44) 山崎茂雄(42) 中尾清治(40) 佐藤正昭(39) 丸山正記(37) 大須賀春一(35) 高田智博(3) 金子恭朗(30) 佐藤由(26)」

プラブーツ突然破壊シンポジウム(3)

VI パネル・ディスカッション

〔司会〕小野寺齊（日本山岳協会）〔パネラー〕重廣恒夫（スポーツ用品工業協会）
越谷英雄（ICI石井スポーツ）野沢井歩（体験者）近藤和美（日本勤労者山岳連盟）
中川裕（日本ヒマラヤ協会）熊崎和宏（日本山岳会）

■突然破壊体験者の報告に関連して

小野寺）〔パネラーの紹介。今日のこれまでの経過説明。〕初めに越谷さんに、突然破壊の体験者である浅見さんの報告を聞かれましたというように感じたかお話し下さい。

越谷）暫く保管していたと言いましたよね。一言相談して欲しかったなと思いましたね。フリークラミングをしていて、マッターホルンに行く事になって、思い出して引張り出したということですが、ダウン製品なんかもそうですが虫干しをしますよね。やはり自然の風に当ててやる大切さもあるのではないかなと感じました。

ナイロンのロープもそうなんですけれども、使っていないくても新品で買って来て3～4年部屋にぶら下げて置くだけで、強度は半分くらいに落ちるということも知っておいて欲しいと思うんですね。だからプラスチックも、ある程度同じ事が言えるのではないかなと思いますね。

小野寺）それでは近藤さんいかがですか。

近藤）3年前登山時報の編集を半年くらいやっていた時に、吉川さんの投稿が飛び込んで来ました。私も前の年からプラブーツに切り替えましたので、そういう事例を目にして非常に恐ろしいなと思いました。それで速報的に取り上げた訳ですけども、その後3ヶ月後に特集を組みました。

4団体が懇談会を作って事態の改善のために努力されたと思いますけれども、構成団体員の一人として関心を持っています。3年たって本当に改善して欲しいような状況に未だ至っていないと思います。相変わらず突然破壊の恐怖はつきまとっている訳です。ユーザーとしては何とかならないかなと素朴で切実な願望があります。ただ午前中の大石先生の話を聞くまでもなく、いつ壊れ

始めるか、壊れ始めてから完全に駄目になるまでにどれくらいかかるのか、というのを予測するのは非常に難しいだろうなというのは素人ながらも感じていましたから、逆に一朝一夕は解決しないだろうなと悲観的な感じも持っている訳ですね。

そうはいっても7千、8千の所でそういう目に遭って★★★動けなければ凍死するしかない訳です。すから、こういう事態だけはなんとか避けたいと、自分の時だけなんとかそういう目に遭わないで欲しいなと思っていますが、マッターホルンでもティリッチ・ミールでも遭った人がいる訳だから切実な問題だと思います。とにかく3年経ってほとんど事態解決の方法が見出されていないのは残念でもあり、逆にしょうがないのかなという感じもするんです。

小野寺）登山時報の中に小西さんが、輸入業者の立場でかかれています。同じく輸入業者として、重廣さんにもいろいろ努力していただきましたし、我々と一緒にポスターやアピールの問題でもやっていただいたわけですが、その辺の経緯等々につきまして重廣さんをお願いしたいと思います。

重廣）経緯につきましては先程お話ししたとおりであります。プラスチックが壊れるという問題が非常に大きくなったというのは、ひとつは、ある日突然壊れたということが、一番大きいと思います。これが一日しか履いていない十年経っても壊れない、その対極にある日突然壊れるという問題がある訳です。この大きな要因というのは、何時造られているのかということが分からない、あるいは分かりにくいということと、その商品がどれくらい使えるかというのが、表示、今迄の我々の経験では分からなかったということになると思います。

一つは製造年月日がいっつであるかを、我々が明

確に表示するというので、現在やっています。お買いになったあるいは所持されている方が、今自分が持っている物がいつ造られた物であるか、分からない部分があると思います。基本的に輸入業者それから販売店にお問い合わせいただきますと、その商品が何時造られた物か、ほぼ分かるようになっています。決して分からない訳ではありませんで、その商品の名称若しくはカラーによって大体何時造られた物か、おおよその見当は分かるようになっております。不明な点がありましたらそれぞれの取扱業者それから小売店の方に照会下さい。

それと現在販売をしながらお願いをするという中で、手入れをして下さいというお願いと、保管に気をつけて下さいというお願いをしております。そして、もう一つは使用に関して、皆さんがどういう状況でお使いになるのか分かりませんので、明確にこの商品がどれくらい使えますよ、ということが表立って言えません。これは保管方法やメンテナンスの方法によっても違います。あるいは登り方によっても★★★破壊が違ってきますので、今、現在では、物理的な性質で壊れていく物と、化学的変性によって壊れていく物と混同されていますけれども、できれば物を使いこなす中で、逆に言うとも使用者方にも分かっていたきたい、という部分があります。

何遍も申し上げますけれども、元来ならば賞味期限というのが的確に明示できればいいのですけれども、まだ適用されている素材の段階でも解明はできていませんし、その間にいろんな添加材がありますとか、いろんな製造工程を経るものが、最初の素材の追跡だけで、出来上がった製品の能力の表示をする事はできない、という事で今日は御了解をいただきたいと思います。

小野寺) 製造年月日ということに関しましては、以前から要望していたものの中の一つなんですけど、実現できたということで、中川さんからユーザーの立場からお願いします。

中川) 先程の浅見さんの体験談は象徴的なことだと思うんですね。僕はこのところヒマラヤに行っていますが、この十年でプラスチック・ブーツは3回くらい靴を替えている訳ですね。それは消耗

が激しいものですから、ちょっとアイゼンで傷いたりしますと怖いものですから、遠征中に壊れたら相当な危険があるだろうと考えています。自分自身この突然破壊の問題が起こる前から、やはり壊れるんじゃないかと思っていました。

製造年月日という情報の提供は必要ですね。ユーザーはその情報を知っていても、俺は大丈夫だというのが、ほとんどの山やさんの気持ちだともお聞きします。これを知らないでいる人がいるという事が問題です。こういう問題をユーザーにどのようにして情報提供するかが問題だと思います。

小野寺) 情報の提供、先程重廣さんのいうソフトの問題ですね、それが大事だということですが、同じく熊崎さんいかがですか。

熊崎) 今日のシンポジウムを聞きまして、随分と僕自身は成果があったなと思います。新たに知ったことや認識したことがいっぱいありまして、非常に良かったと思います。当初より日本山岳会もこのプラブーツの突然破壊問題に関する懇談会に加わりまして、この問題に取り組んできた中で、責任の所在の追求というところで、日本山岳会是他団体と相容れないという意見がありました。そういったことも踏まえて今回、問題の現状を正確に認識しようということでのシンポジウムであると理解していますが、各方面の専門の方の意見を聞いて大変ためになりました。

率直なところ一番私になるほどと思ったのは、越谷さんのお話でした。プラスチックが壊れないという風に見えるという認識も、確かに全然全く違うのと、本当に我々クライミング用のナイロン・ザイルなんて一回ショックがかかったら捨てますし、けばだってきたら捨てる訳ですし、その感覚で言えば9m/mザイル一本5千円として、プラブーツが一足3万5千円としても、たしかに倉庫に眠っていたものを引っ張り出すとか、アイス・クライミングとかミックスで長く使ったものとか、ヒマラヤに行く前には捨てるということは、考えて見れば当たり前だなと。

この問題が進展しない原因の一つには、登山者の側の壊れた例での細かい日頃の管理の方法とか、登山者側の情報も十分に提供されていなくて、メーカーであるとかそっちの側も対策をしようがない

ところもすごくあるのではないかと感じました。

ナイロン・ザイルに本当に似ているなと思いました。合成の素材の物が紫外線に弱いというのはごく当たり前ですね。ナイロン・ザイルに関しては我々思っていますから、登山靴にしても合成素材で全く同じなのに、プラブーツだけ絶対大丈夫と思ひ込みがあったのかなという気もすごかったです。

■通常の保管でも起きる突然破壊

近藤) 今、熊崎君が云ったようなのも一つの意見だけれども、我々ユーザーとしては、自分達に使い方に責任があるんだという風にもっていきやしないんですね。プラブーツは明らかに革靴よりもメンテナンスが楽だし、たしかに水洗いしてそれをふきとって涼しくて暗い所に保管しておく、勿論インナーは革靴の時代もそうですけれども、インナーを出して中敷きも出して乾かして保管しておく。

ビニール袋なんかに入れて保存するのはもってのほかで、これは革靴の時代からそうです。店で引き取る時には最初には、ビニール袋だかポリエチレンの袋だかに入っているんですが、大体こういう出荷方法事態が問題になる。そういう袋に入ってきているから、そういう保管方法がいいのかなと思うユーザーもいるかもしれない。最近どうなっているのか知りませんが。

これだけ沢山壊れたという事例があるということは、使い方の責任に帰してはいけないと思います。やはり、大方の人が普通に使っていて尚且つ壊れたという状況が問題なんです。だからこれは造る側に大いに責任を感じてもらわなければいけない。ただ、プラブーツは全て輸入品です。我々がこれだけ改善を求めるにしても、それこそ足の裏が痒いのにプラブーツのビブラムの上から足の裏を搔いているようなもので、越谷さんが小売店を通してくれなかったというのものもあるけれども、小売店さんも輸入側も重廣さんも小西さんも我々と同じ山やである訳だし、こういう問題もすぐ分かってもらえる訳ですね。それだからすぐに輸入側に行っちゃったというのものもあるんでしょうけれども、それにしても、そこからイタリアなりドイ

ツなりのメーカーのところに改善を求めるのは確かなかなか大変だなと思うんです。と思うんだけど、厳冬の穂高や剣の稜線で突然壊れたら簡単に帰ってこれないし、7千、8千の所ですなったら本当に死んでしまう可能性大な訳なんですから、それは改善を求め続けるしかないと思います。

私は小西さんにインタビューした時に、午前中に大石さんが云われたように、メッシュを編み込むというアイデアは確かに出ていました。実際に出来るのかどうかというのは緊急課題なのでしょうけれど。その小西さんが書かれた文章の中に、昔は#5512という物が素材だったものが、93年の時点で4～5年前に#4033という少し改良された物に変わったということが書いてありますね。その後も改良されていけば非常にいい事なんです。輸入商社さんにはこのような改善がされるようにしつこく製造メーカーに求めて行って欲しいなと思いますし、そのためには我々も声を出さないといけないと思いますし、いい意味での圧力団体になっていかなければならない。そのためには4団体の懇談会は非常にいいことだなという風に思っています。

これは立場立場で変わるんでしょうがないんでしょうけれども、私が小西さんにインタビューした時も、「小西さんの話しは分かったけれども、私はユーザーの立場で記事を書きますから」と言ったら、「いやーそれは分かっているよ」と、「そうじゃなくちゃいけないからな」と快くわかってもらったんですが、売る側の小西さんの立場でいうと、靴をいつまでも使っていないで、早目に取り替えてもらいたい、とそれの方が靴は沢山売れるでしょうからね。ユーザーにとっては、そういう風になってもらっては困るですよ。プラブーツが1万円ぐらいで買えるのであればいいですよ。遠征登山をする人は皆切り詰めて金を溜めて行く訳ですから、まだ使えるかも知れない物を捨てるなんてことはしたくないし、ゴミを増やす事につながる訳ですし、なるべくギリギリまで使いたいんです。

私は浅見さんが久し振りに使った靴のことを少しも非難する気になれないですね。プラスチック

の質の均質化はすごいものだなと思います。これは吉川さんの例の物と全く同じグリンタですね。吉川さんも浅見さんも同じ時期に買っているんですね。吉川さんは年にそこそこ冬山に行っているので多分グリンタを履き続けてブランクはなかったと思います。浅見さんはかなり長いブランクがあった。ところが壊れた時は同じ93年ですね。つまり使っているのがいまいが、もしかしたら同じように壊れてしまうのかもしれない。実際そういう報告もありますので、だとしたら非常に由々しき問題です。

というのは僕も遠征の時に恐ろしくて、予備の靴を借りて持って行ったことがあります。借りる事ができなければ、新しい靴を買っていくということになりますが、その新しい靴も使わなくても劣化して行くのだったら投資の無駄遣いですね。そういうことは貧乏な山やとしてはやりにくい。こういうことは売る側には是非理解して欲しいなと思います。ただアンケートを見て多少ホッとしているのは、壊れている物はかなり昔に造られた靴が多い。それから特定の銘柄に集中しているみたいだ、ということに少し救われています。

材料が少し新しい物に変わったという、その変わった以後の物には壊れている物が案外少ないのかな、だったら少し救われるなと考えています。是非壊れ始めてから完全に駄目になるまでのタイムラグの長い物、粘りのある物に変えてもらうようにしてもらいたいなと思いますし、そうならいけばかなり安心できるなと思います。そのへんを輸入側でメーカーの言質をとってきてもらうといいなと思います。

私は92年の5月にプラブーツを購入してから7千、8千mの4回を含めて10回ほど遠征に行っていますがまだ壊れていません。何時壊れるのか心配なんです、これからも使い続けるには、今まで使っていなかったオーバー・シューズをつけるか、そうすればバラバラになっても少しは助かる。それからワンタッチ・アイゼンを止めてバンド式のアイゼンに変えるかな、とか防衛上は考えられるかなと思っています。

小野寺) 近藤さん、一つ確認しておきたいのですが、極論になるかも知れませんが、ユーザーの責

任に帰したくない、というお考えだと思うんですが、熊崎さんがおっしゃったように、ユーザーもある程度保管をきちんとして、その上でユーザーに責任を帰さない、という考え方なのか、それともどんな場合でもメーカーに責任をもって欲しいと考えるのか、ちょっと極論になるかも知れませんがお願いします。

近藤) どんな場合でもということは有り得ないんで、例えば大石先生も言われたように、乾かすのにまだ濡れているのにストーブの傍で乾かしたなどというのは、絶対にユーザーの責任ですよ。ただ、私がさっき言ったようなメンテナンスは、普通に大抵の人がやっていると思うんですよ。それで尚且つそういう状況になるんだったら、これはユーザーの責任ではないなと。

実際に革靴も高いけれども、プラブーツもつけて安くはないですね。どんな時でもユーザーに一切責任はないんだ、とは絶対に考えていないんだけど、普通の使い方であんな状況はやっぱりメーカー側に責もあるだろうし、改善もして欲しいなと思っています。

小野寺) ユーザーが普通どおり保管した上で問題が起こったということが問題なんだということです。この点、重廣さんいかがですか。

重廣) いまこのような破壊の問題が起きているプラスチック・ブーツは、シェルの製造年が、例えば、今から十年前、あるいは4～5年前と色々な事例があるだろうと思います。

基本的にプラスチック・ブーツに使われています原材料は、ほとんどがバイエル社が供給をしその後各社がその素材を加工し、それぞれのメーカーに供給をしています。各メーカーは使われる★★を想定し、それぞれの社内基準をチェックしながら実際★★を使っています。これはメーカーによっても違いますし、品番・機種によっても違いますが、89年から92年にかけて素材が大幅に変更されつつあります。当初はポリウレタン、エステル系の物が沢山使われておりましたけれども、その後★★★系の物に変わり、最近ではポリアミドに変わっているのが現状です。

こういう議論の場で一つ誤解のないようにしていただきたいのは、じゃ去年売った物がどうなっ

ているんだ、ということをとるあえず含めてお話ししていただかないと、十年前の物を今に持ってきて、今の靴がどうなっている現状か分からない時に、これから十年の予測をするというのは非常に難しいだろうと思いますね。

そういう意味で事故が起きた物が、何時から何時迄に製造され、その起きた実際をとるあえず系統立てて追跡して行く必要があるだろうと思います。92年に発生した事例がそのまま消滅をしたと考えていませんで、それぞれ発生するたびに製造メーカーに通達をし、その改善の要望をしております。プラスチック・ブーツが破壊という事故がそれこそ販売してから数年以上経て顕在化したというように、非常に分かりにくい部分がある訳ですし、また改良を重ねているということをとるあえず御理解をいただきたいと思います。十数年前に販売された物と、今、販売されている物とは素材が変化しているということは、御了解をいただきたいと思います。

これから材質なり構造上の改良をする場合に、必要になるのが、悪かったところの事例でありますから、是非いろんな靴をえそんじた場合に我々業者の方に連絡をして欲しいということです。基本的に我々はユーザーのカシを発生した場合、販売をした小売店さんを通じて我々の元に返って来る訳ですし、我々はその背景を伝達し、それを製造メーカーに送付して改善要求をするというのが現状でありますから、顕在化した物は是非ご連絡をいただきたいと思います。取扱い業者やメーカーがそれをそこで留めているということではありません。メーカーは素材の変更を含めて改善しようと努力はしておりますので御了解をいただきたいと思います。

■突然破壊の背景を探る

小野寺) だいぶ古い時代に造られた物と最近造られた物では違うし、メーカーの方では改良している、という事でしたが、先程近藤さんの方からも突然破壊があったのは、どちらかと云えば古い時に造られた物なので、比較的安心しているというお話があり、越谷さんの方からもどういう場所でどういう風に使うのか相談して呉ればそれに

応じてアドバイスや販売ができるとお話ししました。この件に関しまして越谷さん何かありますか。越谷) 小売店の対応としまして、道具はある程度アイスクライミング向きとか、ヒマラヤの高所向きとか、目的別に造られている傾向にあります。ヒマラヤの高所で使う物は、低山の雪山で使う物と違ってシェルアッパーが硬くなったり、素材が変わったり弾力性なども違う訳です。我々にとっては使う側の意向を汲みながら、足型や予算とも相談しながら見合った物を奨める訳です。

このところの傾向として靴の値段が3年くらい連続して下落している訳ですね。これは我々にとってもユーザーにとってもいい事だと思っています。その中で一番大事なのは、その方に合っている商品が多い方が、我々にとっては対応し易い訳ですね。例えば、この商品は合っているんだけど、予算的に合わない場合もあるんですが、その時に値段が下落していれば、選ぶ幅が大きくなる訳ですから、よりその方の使い方に合う物が出て来るんですよ。その方の使い方に2種類あったとしますと、こちらはいいんだけど色が入らない場合もありますから、それに対応するためにはいろんな物が多い方が、使う方にとっては有利なんですね。

我々が望むのはより多くの種類があって、使う方のニーズに当てはまる物をできるだけ売ってきたい訳ですよ。当てはまらない物を無理して押し付けることは、一番心苦しい訳だし当然それはまずいわけだから、我々としてはやはり予算内で、できるだけその方が満足する物を売る事が大事です。その方のニーズに合っている物を、より多くのレパートリーを揃えたいというのが我々の希望なんですね。それだけにプラスチック・ブーツが、店頭に並びにくいような状況は作りたくないと思う訳ですね。

プラスチック・ブーツは、置いてる数が少なくて買う方も限定されると思うんです。それだけにできるだけ故障の少ない物が、それなりの価格で皆さんが選べるということが、我々も同じ思いなのです。何故かと言えば、我々も当然山に行きますし、当然プラスチック・ブーツも履いてますし、これは当然の事なんですね。ですから種類が段々

減って来るのはまずいな、というのが僕等の実感なんです。

冒頭申し上げたように、輸入元がビビッて数を制限する傾向が出てきています。逆に本来なら出せるんだけども契約分だけ注文呉ればいいよと、特別多く出さなくていいよと言われてしまう状態になると、誰の得にもならないんですね。ユーザーにとっても10月頃売っている値段と4月頃の値段が同じようになってしまう。プラスチック・ブーツは革靴とちがって1年間履いて足にいい感じで馴染んだという、雰囲気とは違うと思うんですね。それだけに多くの中から最初から足に合う物を選んで貰いたい、というのが小売店側の希望なんです。これしかないよ、と言われて仕方なく買よりは、三種類の中から選べる事の方が、我々は希望しているんですね。あまり輸入元をビビらせないようになんとかうまくしたいというのが現実です。

小売店の業者だからただ儲ければいいんだ、ということをやっているんだったら、プラスチック・ブーツは、こういう煩わしい問題もありますから置かない方がいいですよ。トレッキング・シューズだけ売っていた方が気が楽ですよ。でもそれとはちょっと違うんですね。我々はキッチンとした用具を提供する使命があると思っていますし、このような登山の文化は非常に大事なことだと思っていますし、それを高めていくためにも、我々も努力しなければいけないし、輸入元もそうですし、使う側の方達もそれなりの研究をしてもらいたいというのが本音ですね。

アメリカやヨーロッパでは、突然破壊が少ないのに何故日本に多いのか、その背景を考えて見る必要がありますね。皆さんご存じの事です、日本の気候は、北海道を除くと湿潤温暖気候ですね。アメリカのカリフォルニアは大陸性の乾燥気候です。日本は非常に一年中湿度が高い、平均3500ミリや4000ミリも雨が降る。2年前の鹿児島では5000ミリも降っている。カリフォルニアは50ミリしか降らない。1年間に一回しか雨が降らない事もある訳です。同じ場所に同じ保管の仕方をして、当然湿気を吸う事も違うなということもあると思うんですね。欧米と同じように結構気を使ってる

つもりでも、大気中の湿度が既に違うのが影響するのかなとも考えました。我々も売る時にこういうところに注意をして下さいと、もっともっとはっきりと言うようにしたいなと思います。

■三者の協力で問題の解決への努力を！

小野寺) 業者の方もいろいろ努力されているのですが、ヒマラヤの体験を踏まえて、野沢井さんの方から業者の方へ要望点がありましたらお願いします。

野沢井) 自分の場合は手入れを全くもしなかったりと反省すべき点も多く、また、インナーもその靴の正規の物でないインナーを入れたりとかしていますので、今回に限っては結構自分に責任があるのではないかなと思います。

今回ヒビの入ったプラブーツを持って帰ったのは、たった2年しか経っていないのにヒビが入ったということで、買ったカモシカスポーツの笹原さんはよく知っているの、新しいのと取り替えてもらおうと思いました。今回研究会に出て、いろいろな話を聞いて反省点が多かったなと思っています。

ただ、やはり特にアタック時にいきなりヒビが入入ということは、致命的になりますので、これからこういう懇談会で解消して貰いたいなと思います。

小野寺) 野沢井さん反省しきりなんです、そうはいいいましても前兆、劣化の進行状況が分からなかったという事もあったと思います。会場の方もどうぞ発言して下さい。

野口) 越谷さんから責任のなすり合いをしている、という話がありましたが、4団体では全くそういう認識は無いんですね。小売店とか業者を責めるとかいうのではありません。輸入したプラブーツを使用するという登山の世界は小さな世界なんですね。そういう意味では同じ山やとして共同していけるのではないかなと思っています。例えば、4団体が出来る前に労山の方でインタビューしましたが、小売店や業者の皆さま方に質問しました。

登山者が小売店を責めていないし、輸入業者を責めてもいません。そういう点では、今、突然破

壊問題に何が必要なのか、それが今回のシンポジウムで一番知りたかったことなんです。私自身は、やはりメーカーにそういう物を造らないで欲しいということを、日本の輸入業者・小売店・ユーザーが共同して要望することが必要なのではないかと、それには、一般的に言えば国が、具体的に言えば通産省がそういう仕事をやってもらうことが、納税者の国民として必要なのではないかと午前中報告した訳です。それについて、根本原因が分からない突然破壊について、前兆が分かるようにするという点について、お二人のご意見をいただきたい。

西本) 越谷さんに質問するのですが、責めたりするつもりは無いんです。例えば、こういうことをおやりになっていますね。古くなったザイルを安く売るとかね、私も買いましたけれども、現実にプラスチック・ブーツの古いやつを5千円とか3千円で売っているところがあるんですよ。4〜5万円するやつが5千円くらいで買えるんですから、2〜3回でぶっ壊れてもいいやと買いました。

一方で小売店はそういうことをやっているじゃないですか。在庫品一掃をやっているでしょう。それで、これは非難めいて聞かえるかもしれませんが、そういう意味ではなくてね、片方で使い方が悪いとか不勉強だからみたいなことを言われてもね、ちょっと小売店さん変じゃないの、という気持ちも正直あるんですね。

重廣さん、使いこなされる、使いこなす云々と、おっしゃられていましたが、使いこなすという事は、現実に履きこなすということですよ。ある程度履けば履き心地が良くなるんですよ。でもすぐに壊れてしまうという事は困る訳でしてね。責めるとかそういうことではなく、やはりよりいい物を求めるのは、買う者として当然のだし、その点から国を動かすなりこれまでもやっていた訳ですが、製造メーカーにいろんなことを言っていた点で、そういう点で山岳4団体がやってきたことが、騒ぎ過ぎだとしても思わないし、もしこういうことをやらなかったとしたら、それぞれの団体に対応したにしても、世論の力にはなっていかなかったと思うんです。

一時マスコミもかなり取り上げて呉れましたし、

それが少なからず通産省あたりに影響を与えたのは事実だと思うんです。だから騒ぎ過ぎ云々という言い方は、ちょっといただけないのでお聞きしていて遺憾に思ったんですよ。

登山者の利益になることが、結果的に小売店さんや輸入業者さんに還っていくということではなければ話しは逆さまだと思うんですよ。その点気になりましたので申し上げました。

越谷) 先程ちょっと誤解を受けたかも知れませんが、言われていることはセールのことだと思うんですが、我々は製品を売っているいじょう、やはり売る責任があるんですね。突然破壊問題を4団体がやっていて、時々4団体と輸入業者の会合もあったみたいなんですね。その状況を我々ももうちょっと詳しく知りたかった、ということを入れたんですね。それを冒頭申し上げました。

ブラブーツを数千円で売っている店もあるよということですが、現実にそういう店もあると思いますが、それが悪いということではなくて、それがいつの頃の靴なのかということ、買う側は聞いた方がいいと思うんですね。1年前の物なのか、3〜4年前の物なのか、それを知って使う分にはいいと思うんですね。自分で納得して分かってうまく使えると思うんですね。ロープなんかはあまり売れない店で買うと2〜3年前のぶら下がっている在庫を買わされることもありますから、何時ごろの物かを気にした方がいいですね。

重廣) 皆さんは物の価値を御理解いただいているということだと思うんですね。購入される場合に対価としてこれが何時造られたか、ということに現在の仕組みでは、聞けば分かるようになっていきます。

履きこなすという過程ではなしに、プラスチック登山靴の特質を理解して欲しいということでありまして、いい面での特質もありますけれども、デメリットがあると申し上げましたのはそのところなんですね。

今、あまりにも物が簡単に手に入る時代になってきました。逆にユーザーの立場にたちますと、あまりにも物を簡単に手に入れることができるようになった故に、その中身を知らずして使っていることが結構あります。実際に我々が厳しい自然

と対峙した時に使う場合には、使う人自身がその物を理解していないと、100%能力なり特質を引き出すことはできないだろうということなんです。

その中で我々輸入業者ができることと言いましたのは、これはこういう能力を持っているんだということを知らしめるという方法でありますし、カタログなどを通じて皆さんに伝えていきたいと考えております。

先程来、製造メーカーや輸入業者を責めると物が入って来なくなるという話が出ていますが、実際そういう傾向にあるのはあるんですね。こういうプラスチック製の商品を作る場合、例えば、スキー靴ですと年間40万程度造らないと採算が合わない。それが日本でプラスチック登山靴が造られていない原因なんですね。それこそ8~10社が輸入して販売しても売上は微々たるものなんです。ましてや利益は微々たるものです。私の会社はたかだか1500~2000足輸入していろんな問題が生じるならば止めてしまえというのが経営トップの判断なんですね。特に昨年7月21日以降PL法が成立して、ユーザーの方の権利追求がし易くなった。そこで輸入をしたり販売をしたりする業者の義務が拡大して来る訳です。そういう意味では命にかかわる商品はどちらかというと、これからドンドン扱うのを少なくしていこう、無くしていこうという傾向にあります。

ところが実際に山に登る人にとって便利な物を我々は無くす必要はないだろうと思っています。そこで先程申し上げました、今よりよりいい物に替えていこうというのが、登山者のみならず輸入業者の考え方ですから、その辺は御理解をいただきたいと思うんですね。ただ、この変化・変質というものが即、出てこないという点で我々の返答の仕方も、なかなか煮えきらないところがあると思います。非常に分かりにくさがあるんじゃないかなと思います。

ある程度の寿命、使用年数を我々は、基本的には5~6年だと考えていますが、モデルを変化させたりする単位、通常のメーカーですと3年ですが、2回なりで変わる時点で新しい物に取り替えていこうということです。

プラスチック製登山靴が何年持たなければいけないのか、という要望がありましたら是非その辺をお聞かせ願いたい。10年なのか20年なのか、我々取扱業者はそれに対応できないとすれば、例えば、取扱いを断念せざるを得ない、というところまで来るんじゃないかというように思います。

私自身は、輸入をしていながらおかしいんですけども、プラブーツをそんなに信用していません。84年から使っていますが、私は一つの物がそんなに長く使えるというより、使うという事の方が若干自分自身の甘いところがあるんじゃないかなという気がしています。勿論対価として支払われる類は比較的高額なものですから、一回の遠征あるいは何日間という日数で計った場合は難しい部分があるとは思いますが。

大石) 合成材料にはパーフェクトな物は全くありませんから、どういう欠点をもっているかということを理解しながら使うというのが大前提です。どう慎重に使っても寿命というのがありますから、それは考え方がいいです。

ただ5年とかあまり年数で決めるのは難しい。それは使用頻度・環境条件保管状況とかによって寿命が左右されますから、単純に暦で何年という風な決め方はできないと思います。破損の原因については調査すれば分かります。〔注：スキー靴の実際について紹介があった〕そのような調査を実施すれば主原因については分かります。

提案があります。どうしたらいいのかですが、劣化は設計の問題があります。形状の設計、厚みとか角度、角があるとか、成型条件に合わせた設計。使用条件に合わせた設計。材料の選択も千差万別な材料の中から選ぶ訳です。一言で言うと非常に微妙なところで成り立っています。この使い方というのはプラスチックでは無理です。硬過ぎるとか柔らか過ぎて屈曲しますね。温度条件が非常に幅が広いですね。

プラスチックとゴムの中間的なグループでプラスチックに似た構造で、成型もプラスチックと同じように射出成型ができるけれども、性質はゴムに近いものがあります。

今、現時点で提案できるのは、例えば、我々が調査した結果、加水分解による劣化であると判断

した★★★★施設があるんです。温度を上げたり水の中につけたりそういう試験を、製造メーカーの方に要請して、品質管理をもう一度見直して、実際のトラブルをシュミレーションして、模擬試験をして、どういう原因でどういう作用で駄目になるかということを、実験的に再現し、条件を見つける事ができます。

そういう条件で製造メーカーで抜き取り試験を行うということを要請して、工夫することによってさらにいい物になっていくと思います。それでユーザーは弱点を理解しながら使っていくということで、お互いにやっていけば信頼性が上がっていくと思います。

■継続した活動が事故防止につながる

小野寺) 今迄の議論をお聞きになって、国民生活センターの片岡さんにご意見をお聞きしたいと思っています。

片岡) こちらから突然シンポジウムのFAXが届きまして参加しました。実はこの資料の中にもありますように、私共では、平成6年1月にスキー靴とプラスチック製登山靴を含めた事故事例について、今日お見えになっている重廣さんにも会ってどういう対応をしていただくか、まとめて発表した経緯がありまして、その後の私共としまして、どうなっているのかなということがありまして、その後の情報が私共にも入っていなかったものですから、情報を収集したいなということで今日参加させていただきました。

今日のお話しをお聞きしていますと、平成6年1月に私共が出した要望が、基本的にはクリアされていない、クリアするのはかなり難しいと思うんですが、同じような問題が残っているんだなという気持ちを強く持ちました。私共は主に消費者が沢山使っている商品を扱っていますので、どちらかというと登山靴よりスキー靴の方に重きをおいたような情報の提供の仕方をしていますが、それを含めてメーカーの方が経済的な問題もあるんだと思うんですが、たえず安全な物を造って貰いたいという要求をしていきたいと思います。

近藤) 先程重廣さんが言われた、どのくらい持てばいいのかというお話しがありましたが、我々は

使う方は、長く持てば持った方がいいのは間違いないんで、なるべく寿命は長くしてもらいたいなというのはあるんだけど、今日のシンポジウムにもあるように「突然」というのが入っているんですね。突然というこれが問題だと思うんですよ。大石先生が人間の体に例えられて、そんなのはいついつと貴方分かりますかと云われましたが、実際プラスチックあるいは高分子の物は非常に予測し難いということは分かったんですけども、それでも「貴方ガンですよ、後3ヶ月の命ですよ」と言われればその間にやり残したことをやろうと思う人もいますよね。だけれども前の日迄分からなくて、前の日になって「貴方ガンですよ、だから明日死にますよ」と言われたらどうしょうもないのと同じで、是非なるべく壊れ始めてから完全に駄目になるまで、時間が伸びるような材質に改良してもらいたいなと思います。これが全体の寿命よりも、ぼく等が切実に要望したいことです。重廣さんは私よりもヒマラヤに行かれていますので同感だと思います。

最初からこれは是非言っておかなければと思ったのは、今日も岳人さんや山溪さんが来ていますが、この問題に関して非常に影が薄いんだと思うんですね。登山者の味方である筈の山岳ジャーナリズムが、この問題が起きた時にすごい及び腰だったと思うんですよ。それは広告主の関係もあるでしょう。確かに「暮らしの手帳」のような訳にはいかないでしょう、「登山時報」は確かに暮らしの手帳的な編集ができたと思うんですけども、それにしても「山溪」は日本で最大の山岳雑誌な訳ですけども、もっともっと登山者に対して啓蒙して良かったんではないかなと思うんですよ。例えば、私が小西さんと話して、使用者側と供給側で話ししても別に陰悪になる訳でもないし、こういう立場で記事にしますと言えば理解もして貰えます。

まだ遅くないと思うんですね、これから新しく登山者は生まれる訳だし、一過性に終わらせないで折に触れてプラスチック・ブーツはこういう使い方をしなければいけないですよ、ということをやってもらいたいし、4団体の活動についても追跡して報道してもらいたいなと思います。

中川) 4 団体が話し合ってきたことの主旨として、プラブーツが突然破壊するという、我々に前兆現象が予見できないことがありました。

何年持てばいいのかと聞かれて、素人が10年持つ物と答えて、10年持つ物を10万円です、と言われてもどうしようもないんです。その辺はすごく難しい問題ですので、皆さん達の手には負えないです。

突然破壊した物は古い物に多いんです。登山者の中に古い物、白いコフラスコを持った方が山に行かれている場合がある。その中には多分に突然破壊する可能性のある物もある、ということは現実的に分かりたいだけだと思うんですね。一歩間違えば致命的な事故につながりかねない、危険の中にいる登山者が多くいる、という問題にたいして4 団体が何をできるのか、というスタンスが第一にあります。

小野寺) 突然破壊の事故を防ぐために、我々には何ができるのか、という事になって来ていますが、この問題についての4 団体の見解は、本配付しましたアピールや4 団体がアンケート結果についてまとめた「プラブーツ懇談会の見解」としてまとめられています。

4 団体でアンケートを実施したりした結果ある程度の啓蒙やアピールはできましたが、それでも突然破壊の心配がある訳ですね。我々4 団体は声を大にして、ああして欲しいこうして欲しいと要望をしていますが、ある意味ではこれは一方的な見方かも知れません。使用する側の注意も大切で

すし必要ですが、素人のような人が使っている事も事実です。そんな人達に対して全国団体であるヒマラヤ協会、労山、日本山岳会、日山協でアピールして来ましたが、充分でない、いや不充分と言った方がいいかもしれない。そういう意味ではこれからこの活動を続けて行くんですけども、どこかに限界があるのではないだろうか、そういう意味では、消費者の代表である4 団体の力ではこれ以上の何ができるのだろうかということを考えまして、今回のシンポジウムの開催になった訳です。

本日のシンポジウムでもそれぞれの立場から、状況説明、提案などありましたが、我々民間レベルではどうしてもできない事もあるので、公的機関にも呼び掛けていきたいと思いますがいかがでしょうか。

(会場からスキー協会の方の発言あり)

小野寺) 今日のテーマは、輸入業者・小売店・ユーザーで突然破壊を解決する方法について意見交換ができました。

次のステップとして、公的機関に要望したいのかどうか。現実には業者の方にとっては難しい面があるとは思いますが、ある程度の協力は多分していただけるものと期待しております。

本日出席の皆さんの協力を得まして、これからもプラブーツ突然破壊問題の解決の活動を続けて行きたいと思いますので、ご協力方宜しく願い申し上げます。

Ⅶ 閉会辞

本日様々な立場のみなさんから、プラブーツの突然破壊問題の解決に向けて、ご意見をいただきました。輸入する側・販売する側・使う側が一致協力しなければ、問題解決の道は探れないことは当然であります。

しかし、その中であっても、登山者は登山者として結束して、登山者の立場から発言して行くことも、問題解決には必要であろうと思います。

なによりも大事なことは、プラスチック・ブーツが突然破壊することによって、尊い命が失われ

山森欣一（日本ヒマラヤ協会専務理事）

ることを防ぐことであります。今、古いプラブーツをもっていながら、この突然破壊問題の存在を知らずにいる人達に対して、誰がどのような手段でこの情報を伝達するのが、問われております。

今日のシンポジウムを踏まえて、4 団体、輸入業者、小売店の相互協力は勿論のこと、国の協力も得られるように、さらに活動を進めていきたいと思っています。本日はご協力誠に有り難う御座いました。

プラブーツ突然破壊事故防止のためのアピール

1996年4月 プラブーツ突然破壊問題山岳4団体懇談会

日本にプラスチック製登山靴（以下プラブーツと略します）が普及し始めたのは、1980年代初頭ですが、最近では冬山や春山など積雪期登山には欠かせない、主要な登山靴となっております。

ところが1993年1月中旬、積雪期の東北・白神岳登山中にプラブーツが「突然破壊」するという事故が発生しました。このことはすぐに山岳団体の機関紙や山岳雑誌に発表され、登山界は大きな衝撃を受け、プラブーツの安全性について緊急の対策が必要となってきました。

この事態にあたって山岳4団体はすぐに「プラブーツが積雪期の山行中に突然破壊することは、登山者の生命にかかわる問題である」との認識で一致し、冬山シーズン前の93年10月に緊急アピール「あなたのプラスチックブーツは大丈夫？」など、この危険性を登山者に周知させる努力をしてきました。また、輸入代理店にたいし原因の究明と広報活動を進めるよう申し入れを行い、合わせて突然破壊の現状の把握のため、登山者に対するアンケート調査を実施し、94年7月に調査結果を公表しました。

この調査結果では、経年劣化とは考えられない5年未満の致命的な破壊例が2件あります。また、この間、輸入代理店もプラブーツの保管や手入れ等について登山者向けに広報を行いましたが、依然としてプラブーツの突然破壊の根本原因は未解

明のままで残されております。

プラブーツといえども登山に必要な道具の一つでありますから、使用者である登山者としての一般的な注意義務があることは充分承知しております。しかし、私たちが一番恐れていることは、プラブーツがなんの兆もなく突然破壊することです。積雪期の山中でこのような事態に遭遇したら、場合によっては命にかかわる事態になることは必定であります。

このような関心の高まりのなかで、東京都生活文化局では、94年12月に「プラスチック製スキー靴等の安全性に関する調査」報告書を公表しました。同報告書は、まとめとしてプラスチック製スキー靴等の劣化によって発生する破壊事故を未然に防止するためには、次の対策を講ずることが必要であるとしています。（内容は下記のとおりです）

私たち山岳4団体は、プラブーツが突然破壊する危険性をより広く登山者に周知し、認識してもらい、合わせて関係する各機関にもより一層の努力をしてもらうことによって、突然破壊の事故を防止するために、このシンポジウムを開催しました。このシンポジウムを契機として登山者が一致団結して、プラブーツの突然破壊の事故を未然に防止するためには、東京都の前出の報告書で指摘している対策の実行を国に求めているようではありませんか。

* 東京都生活文化局〔プラスチック製スキー靴等の安全性に関する調査〕

- (1) 今回調査した破壊事故品と同時期以前に製造されたプラスチック製スキー靴の中には、破壊事故が発生する可能性が高いものが含まれていること、また、最近製造されたものも長期間使用することにより劣化することを消費者に知らせる。
- (2) プラスチック製スキー靴等の、乾燥をはじめとする使用後の手入れ方法、オフシーズンの保

管方法について消費者に知らせる。

- (3) 劣化に関する試験項目を含めた、プラスチック製スキー靴等の安全基準を定める。

- (4) プラスチック製スキー靴等の素材及び製造時期を消費者にわかりやすく表示する。

■ 寸 感 ■

プラブーツ突然破壊問題シンポジウムの全文を3回に分けて掲載した。この問題が一部の岳人だけではなく多くの登山者に浸透し犠牲が出ないための防止策の一つとして実行した。熟読されたし。月刊誌「ヒマラヤ」が求められているのは、単に「登るため」の情報だけではないと考えてのことである。

一企業が世界の最高峰を登山すべく準備中である。ヒマラヤの世界はドンドンと変わる。21世紀初の世界最高峰登頂などと云うイベントも出てきそうである。
(山森)

事務局日誌(7月)

- 1日(月) ウィーン大学から京大に留学しているマンツェライター氏が、日本のヒマラヤ登山調査のため来会。
- 3日(火) プラブーツ懇談会(於：労山、山森、中川)
- 6日(土) ムスターグ・アタ家族会と壮行会(於：かんぽヘルスプラザ東京)

- 9日(火) ヒマラヤ297号発送
- 12日(金) 労山高所登山学校壮行会(於：エミール、遠藤、山森、八木原、尾形)
- 13日～14日 ヤンラ・カンリ合宿(ルーム)
- 20日(土) ムスターグ・アタ隊出発。
- 22日(月) 東京集会(11名)
- 24日～31日 事務局夏季休暇

ヒマラヤ No.298 (9月号)

平成8年8月10日印刷 8年9月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる旅へ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004